

第1学年*組 平成*年*月*日(*) 国語科 学習指導案 第*校時 1年*組教室 指導者 傳法谷 公彦		
育成する国語の能力	文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり，必要に応じて要約をしたりすること。	
単元名	随筆（古文）	
単元目標	<p>○語句や表現に注意して文脈を捉え，書き手の考えなどを，間違いなく，過不足なく読み取ろうとする。（関心・意欲・態度）</p> <p>○語句や表現に注意して文脈を捉え，書き手の考えなどを，間違いなく，過不足なく読み取ることができる。（読む能力）</p> <p>○読むことに必要な語句の意味，語句の用法について理解できる。（知識・理解）（〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕のイの(イ)）</p>	
単元の評価規準	関心・意欲・態度	知識・理解
	・語句や表現に注意して文脈を捉え，書き手の考えなどを，間違いなく，過不足なく読み取ろうとしている。	・語句や表現に注意して文脈を捉え，書き手の考えなどを，間違いなく，過不足なく読み取っている。
取り上げる言語活動	現代語訳を利用して古文を読解し，内容を読み取り要旨をまとめる。	
題材（教材）	<p>『徒然草』吉田兼好 第109段「高名の木登りといひし男」 第137段「花は盛りに」 （『新編 国語総合』教育出版）</p> <p>第 92段「ある人，弓射る事を習ふに」 第110段「双六の上手」 第185段「城陸奥守泰盛はさうなき馬乗りなりけり」 （『文法全解 徒然草』旺文社）※現代語訳のみ</p>	
単元（教材）について	<p>(1) 生徒観：『徒然草』に限らず，古文そのものに対して興味をもてない生徒の割合が高い。その理由を質問すると，「難しいから」との回答が大多数である。しかし，約半数の生徒が古文の学習をある程度必要だと感じている。そのため，古文を読む際に壁となる「歴史的仮名遣い」「古典文法」「古文単語」を気にする必要がない現代語訳を利用することで内容が理解しやすくなり，読みを深めることができると考えられる。</p> <p>(2) 教材観：『徒然草』は序段と243段の長短の文章から構成され，話題も様々であり，内容そのものに興味を抱きやすい。本単元では，生徒が興味をもって書き手の考えを読み取るために，様々な分野における名人の話も取り上げた。</p> <p>(3) 指導観：古文を原文に即して正確に訳すことのみを授業の目標にせず，現代語訳を利用して読解させることにより，内容そのものに興味を抱かせ，読みを深めさせたい。また，現代語訳を利用する際，原文とのかかわりを無視することがないように，複数のワークシートを用いて現代語訳が原文とどのように対応しているか確認する作業を取り入れた。</p>	
指導計画（学習計画）	主な学習活動	主な評価
	<p>(第1時)（本時）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「高名の木登りといひし男」（第109段）の現代語訳と原文を見比べながら古文単語や文法事項を確認する。 ・現代語訳を読んで，要旨をまとめる。 <p>(第2時)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「花は盛りに」（第137段）の現代語訳と原文を見比べながら古文単語や文法事項を確認する。 ・現代語訳を読んで要旨をまとめる。 <p>(第3時)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第109段，第137段以外の段(第92段，第110段，第185段)の現代語訳を読んで要旨をまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「高名の木登りといひし男」との会話などに注意して文脈を捉え，書き手の考えを，間違いなく，過不足なく読み取っている。（読む能力） ・読むことに必要な語句(指示語や時制を表す助動詞，敬語を含む)の意味や語句の用法について理解している。（知識・理解） ・各段の文中の語句や表現に注意して文脈を捉え，書き手の考えなどを，間違いなく，過不足なく読み取ろうとしている。（関心・意欲・態度）

本 時 案 (第1時)

本時の目標	○『徒然草』「高名の木登りといひし男」(第109段)の登場人物や会話文に注意して文脈を捉え、書き手の考えを、間違いなく、過不足なく読み取ることができる。 (読む能力)	
学習活動	指導上の配慮事項など	評価・方法など
1 前回扱った内容(『徒然草』を含む、主だった作品の冒頭)に触れ、作者や成立年代について復習する。	○前回学習した『徒然草』の冒頭「つれづれなるままに…」を思い出させる。また、作者や成立年代について、以前にも扱っているが、生徒を指名して、再度確認する。	
古文単語や文法事項を確認しながら現代語訳を読んで要旨をまとめよう。		
2 原文の読みを確認する。	○範読して読みを確認させる。その後、指名して音読させ、読みを再度確認させる。その際、歴史的仮名遣いや読みにくい漢字に注意して音読させる。	
3 「高名の木登りといひし男」(第109段)の現代語訳を利用して語句を確認する。	○指示語や敬語、時制を表す語といった本文を的確に読み取る際に重要となる語句や表現を中心に確認させる。	○読むことに必要な語句(指示語や時制を表す助動詞、敬語を含む)の意味や語句の用法について理解している。 (知識・理解) (記述の確認)
4 現代語訳を読み、設問を解く。設問の解答を踏まえた上で要旨をまとめる。	○以下の内容を確認できるような設問内容にする。 (1) 作中に描かれている人物・事柄・出来事・会話の内容など。 (2) 作者が(1)について、どのような感想や考えを述べているか。 (3) 指示語の内容。 ○設問で解答した内容を踏まえた上で要旨をまとめさせる。要旨は空欄を補充する形式でまとめさせる。	○「高名の木登りと言ひし男」との会話などに注意して文脈を捉え、書き手の考えを、間違いなく、過不足なく読み取っている。 (読む能力) (記述の分析)

『徒然草』② () (組) () (番 氏名) ()

○「花は盛りに」(教科書P220)

◆【現代語訳】の傍線部の語句は、【原文】ではどのような語句が使われていますか。【原文】の中から抜き出しなさい。

【現代語訳】

- 1 桜の花は真つ盛りに咲いているのだけを、月は曇りや影がないのだけを^①()
- 2 見るものであろうか。(いや、そうとはかぎらない。)雨天に向かって見えない月を恋い慕い、
- 3 (簾を)垂らして(家の中に)閉じこもって、春がどれほど深まっていくのか知らないのも、やはり、^②()^③()
- 4 しみじみとして情趣の深いものだ。今にも咲いてしまいそうな頃あいの桜の梢、花の散りしおれている^④()^⑤()
- 5 庭などが、見どころの多いものである。和歌の詞書きにも「花を見に出かけましたところ、
- 6 とつくに散って、(盛りの頃を)過ぎてしまったので^⑦()^⑧()」(詠みました歌)「とも、「さしつかえることが
- 7 あるので(花見に)出かけないで^⑧()」(ひとり家で詠みました歌)「などとも書いてあるのは、「花を見て」と
- 8 書いてあるのに、劣っていると見えようか。(いや、劣ってはいないだろう。)花の散るのを、
- 9 (また、)月の西に傾くのを惜しみ慕う世の風習は、いうまでもないことであるが、なかでも特に^⑨()
- 10 ものの情趣を解さない人が、「この枝も、あの枝も散ってしまった。今はもう見るだけの値打ちもない。」^⑩()^⑪()
- 11 などと言うようだ。^⑫()

【原文】

- 1 花は盛りに、月は隈なきをのみ
- 2 見るものかは。雨に向かひて月を恋ひ、
- 3 垂れ籠めて春の行くへ知らぬも、なほ、
- 4 あはれに情け深し。咲きぬべきほどの梢、散り萎れたる
- 5 庭などこそ、見どころ多けれ。歌の詞書きにも、「花見にまかれりけるに、
- 6 早く散り過ぎにければ」とも、「障ること
- 7 ありてまからで」なども書けるは、「花を見て」と
- 8 言へるに劣れることかは。花の散り、
- 9 月の傾くを慕ふ慣らひは、さることなれど、ことに
- 10 頑なる人ぞ、「この枝、かの枝散りにけり。今は見どころなし。」
- 11 などと言ふめる。

◆現代語訳を読んで。要旨をまとめてみよう。

桜の花は真つ盛りに咲いているのだけを、月は曇りや影がないのだけを見るものであろうか。(いや、そうとはかぎらない。)雨天に向かつて見えない月を恋い慕い、(簾を)垂らして(家の中に)閉じこもって、春がどれほど深まっていくのかわからないのも、やはり、しみじみとして情趣の深いものだ。今にも咲いてしまいそうなる頃の桜の梢、花の散りしおれている庭などが、見どころの多いものである。和歌の詞書きにも「花を見に出かけましたところ、とつくに散って、(盛りの頃を)過ぎてしまったので(詠みました歌)」とも、「さしつかえることがあるので(花見に)出かけないで(ひとり家で詠みました歌)」などとも書いてあるのは、「花を見て」と書いてあるのに、劣っていると見えようか。(いや、劣ってはいないだろう。)花の散るのを、(また、)月の西に傾くのを惜しみ慕う世の風習は、いうまでもないことであるが、なかでも特にものの情趣を解さない人が、「この枝も、あの枝も散ってしまった。今はもう見るだけの値打ちもない。」などと言うようだ。

〔注〕情趣：しみじみとした感動を呼び起こす味わいのある様子。

詞書き：和歌が詠まれた事情などを、その和歌の前に記したものを。

- (1) この文章には続きがあり、作者の考えるものの見方についての一文がある。その一文は次の中のどれか。
- ア 少しのことにも、指導者はあつてほしいものである。
 - イ 何事も、始めと終わりとが、特に趣深いものだ。
 - ウ うわべだけでも賢人をまねる人を、賢人と言つてよいのである。
 - エ なんと、現在の一瞬間においてすぐさま物事を行うことが、難しいことだろうか。
 - オ 今は亡くなってしまった人であるので、これ程の事も忘れがたい。

(2) 次の文は要旨をまとめたものである。①～⑤に当てはまる語句を本文中から抜き出しなさい。

- ① () の盛りだけ、 ② () の影もなく照っている時だけを必ずしも見るものではない。桜の花や月は、盛んな時ばかりを見るものではなく、咲き始め、 ③ () しまった後、雨の日に見えない月を慕ったりするものも ④ () の深いものである。

◆徒然草の第九二段・第一一〇段・第一八五段の【現代語訳】を読んで、それぞれの(要旨)の空欄に当てはまる語句を本文中から抜き出しなさい。

第九二段

【現代語訳】

ある人が弓を射ることを習う時に二本の矢を手にとって、的に向かった。(すると)その先生がいうには、「初心者は、二本の矢を持つてはならない。(なぜなら)二本目の矢をあてにして、一本目の矢(を射ること)にいかげんな気持ちが生ずる。(だから、的に向かう)たびごとに、(一本目であたらなければ、二本目あてればよい)といった、あたりはずれの)利得と損失とを(計算する気持ち)をまったく持たず、この一本の矢で決めようと思え」という。たった二本の矢(なのだし、しかも)、先生の前で、その一本を(射ることを)いかげんにしようと思うだろうか、思いはしない。なまけ心は、自分が意識しないといっても、先生にはそれがわかるのだ。この(先生の)教訓は、万事に通じるに違いない。

道を修めようとする人は、夕方には、明朝があるようなことを思い、(その)朝には(また)夕方があるようなことを思って、もう一度、十二分に修めようということを心に思い定める。(そんなのんびりしたことでは)どうしてほんの一瞬間の中にも、なまけ心が生ずることを知ろうか、知るわけではない。なんと、現在の瞬間においてすぐさま物事を行うことが、難しいことだろうか。

(要旨)

- 弓の(①) ()が(②) ()本の矢を持つて標的に向かうことは、上達を遅らせるといふ矢の先生の(③) ()は(④) ()に通じる。すべての修行においても、他日を期すことは進歩にならない。しかし、現在の瞬間において(⑤) ()物事を行うことはなんとも(⑥) ()ことであろう。

第一一〇段

【現代語訳】

すぐろくの名人といわれた人にその(必ず勝つ)方法をたずねましたところ、(その名人は)「勝とうと(思っ)て(うって)はならない、負けまいと(思っ)て(うつ)べきである。どのさし手がかならず早く負けるだろうかろうかと考えて、その手を使わないで、一目でもおそく負けるような手をとるのがよい」という。(このこと)は(専門の道)についてよく知っている者の教えで、自己の人格をみがき、国を治める道も、また(それと)同じである。

(要旨)

- すぐろくの名人は、勝つことより、(①) ()とすることが必勝法だというが、このことは身を修め、国を(②) ()方法と同じことだ。

第一八五段

【現代語訳】

安達泰盛は、ならぶもののない乗馬（の名人）であった。馬をひき出させた時に、（その馬が）足をそろえて、しきいを軽々とこえるのを見て、「これは気のたっている馬である」といって、その鞍を（ほかの馬に）置きかえさせた。また、（別の馬が）足をのぼしてしきいにけりあてた時は、「これは（動作が）鈍重で、けがをするだろう」といって乗らなかつた。

（馬術の）道を知らない人は、こんなに用心するだろうか、用心はしないであろう。

（要旨）

安達泰盛は①　　の名人であつた。②　　馬や、動作のにぶい馬には乗らなかつた。専門家でなければ、こんなに③　　はしないものである。